

## 上越教育大学研究プロジェクト 終了報告書（若手研究）

研究代表者 所属・職名 臨床・健康教育学系 助教

氏 名 大宮 宗一郎

研究期間 令和元年度

研究プロジェクトの名称	養育者の立場から考察する不登校に至った子どもの臨床心理学的援助についての当事者研究—システムズ・アプローチに基づく考察—
研究プロジェクトの概要	わが国には、クラスに約 1 人の割合で不登校生徒がおり（文部科学省、2018）、不登校生徒に対する支援は、重要な課題である。不登校生徒の支援の研究には、教員やスクールカウンセラー等の学校サイドの視点からの知見（e.g., 石隈, 1999）や、養育者の心理的变化などの視点からの研究はあるが（e.g., 板橋, 2000）、 <u>不登校の子どもの抱える養育者が、学校に働きかけたことによる学校内の教員連携システムの変化やこの変化に伴う学校と家庭の連携システムの変化を考察した研究は行われていない。</u> そこで、本研究では、不登校に至った子どもをもつ養育者に対してインタビュー調査を行い、養育者が、学校に働きかけたことで生じた学校内の連携システムの変容とこの変容に伴う家庭の連携システムの変容について、システムズ・アプローチ（吉川, 2001）の視点から考察を行う。
<p>研究成果の概要</p> <p>※申請時にチェックした「取組課題」との関連とその成果も明記すること。</p>	<p>中学 2 年生 A 子の事例である。このケースでは、中学 2 年の夏休み明けに登校しぶりが生じた A 子への支援が皆無だった学校に対して、母親が強い支援要請を行ったことで学校内に支援チームが作られた。しかし、不登校に至った A 子にその理由を問い詰める担任や、母親から連絡を入れなければ関与がない支援チームのあり方に母親は強い不信感を抱いていた。そのような中、部活の副顧問だった B 教諭は、A 子の目線を大切にしながら支援を行う教諭であり、母子が唯一信頼できる教員だった。</p> <p>中 3 へ進級した際、母子が信頼する副顧問 B が A 子の担任となった。新たな支援チームには、母親の要請から管理職も入り、副担任とともに担任 B のサポートを行った。A 子の気持ちを尊重した支援チームの介入に、母親も徐々に学校を信頼できるようになっていった。並行するように A 子は秋口の頃から徐々に教室に入るようになり、私立高校の受験に合格して進学した。</p> <p>中学 3 年次の支援の推移を踏まえると、学校の支援チーム内においては、管理職や副担任が担任をサポートすることで、担任 B が安心感をもって A 子や母親（家庭）に関わることができていたと同時に、このような担任 B の A 子や母親（家庭）への関わりを副担任や管理職も安心して見守ることができていたと考えられる。これは、<u>教員間の安心→A 子や母親（家庭）の安心という入れ子構造</u>になっている。この並行プロセスは、アイソモーフイズムとも呼ばれるが、この構造が作られたからこそ、学校と母親（家庭）との連携の促進、および A 子の教室復帰、高校進学につながったと考察できる。すなわち、<u>子どもや家庭の支援においては、支援チームを構成する教員の支援が、支援が奏功するための重要な要因の 1 つである</u>ことが示唆された。</p>
研究成果の発表状況	本プロジェクトは、2019 年 7 月に採択されたものであり、2020 年 3 月時点では、研究内容をとりまとめている段階である。2020 年度以降の講義、学会発表等を通じて、その知見を還元することを予定している。
学校現場や授業への研究成果の還元について	2020 年度以降の講義、学会発表等を通じて還元することを予定している。